

「COPD 患者のフレイルに対する漢方薬の臨床応用と考察」

昭和大学医学部内科学講座（呼吸器・アレルギー内科学部門）主任教授
相良 博典 先生

令和3年12月の内科医会学術講演会「特別講演2」では、昨年は新型コロナウイルスの影響でお招き出来なかった、昭和大学医学部内科学講座（呼吸器・アレルギー内科学部門）主任教授の相良博典先生をお迎えし、「COPD 患者のフレイルに対する漢方薬の臨床応用と考察」と題する御講演を頂いた。

先生は日本呼吸器学会のオピニオンリーダーであられるだけあって、COPDの疫学・病態・診断・治療の最先端の知識を、多くのデータを基に、非常に判り易く、系統的に論じて下さり、一時間足らずの間にCOPDの最新の知識を身に付ける事が出来た。特に印象に残ったのは、シスタチンCを、COPDのサルコペニアによる筋肉量の減少の指標にしようとする試みで、漠然としていた今迄のフレイルの診断に一石を投ずる御研究と感服した。先生は、画像・文献の考察を取り混ぜた非常に重厚な内容のCOPDの西洋医学的解説に引き続き、今回の演題の主題であるCOPDへの人参養栄湯の応用について話された。フレイルに見られる、気力低下・食欲不振・体力低下などは、西洋医学では「不定愁訴」で十把一絡げにされかねない訴えであるが、先生は漢方医学の「気血水理論」から導き出される、「気血両虚」の状態であると看破され、COPDの患者さん達に、漢方医学では「気血両虚」に使用される「人参養栄湯」を処方されたところ、うつ状態の改善・気力充実・食欲増進、さらには筋肉量の増加などの著明なフレイル状態の改善を見出されたとの事である。これらの事実は、西洋医学の最先端を走られながらも、西洋医学では対処しきれぬCOPD患者さんのQOLを、なんとか改善してあげたいとの相良先生の熱い思いがもたらした成果であり、臨床家としての心構えを我々に示して下さいましたお仕事と、感銘を受けさせて頂いた。漢方医学を学ぶ者として座長を務めさせて頂いたが、先生の御講演からは、臨床家として患者さんを真に治療するためには、東西両医学を俯瞰した、広い視野での診療が不可欠である事を学ばせて頂いた。ここに改めて多くの示唆を頂いた相良先生に感謝の念を捧げ、学術講演会報告とさせて頂く。

（吉村医院 吉村 信）